

### <1 家族が小さくなる>

20世紀の家づくりというと、両親と子供2人の家が標準的でした。現代では、1～2人家族が普通の形態となり、共働きや一人親世帯も増加しています。世帯数は1970年から2015年まで3,030万世帯から5,333万世帯へ増加しており、そのうち50%以上は、夫婦のみ又は単身世帯です。特に65才以上では、夫婦のみ又は単身の割合が3.4%から23.5%へ大幅に増加しており、2040年には高齢者のみの世帯が30%を超えるといわれています。また、共働き世帯が毎年増加し、2017年時点では専業主婦世帯数の約2倍となっています。つまり家族の人数は少なくなり、そのうちの多くが働いているということになります。暮らしは個人が中心になり、少ない人数で、働きながら育児や介護をしなければいけない、という人が多くなるといえます。

そこで、住宅には以下のようなことが求められるようになります。

- ① パーソナル化への対応
- ② 子育てに対応し、安心感のある遊び場がある
- ③ 子どもや高齢者が人の目に触れる
- ④ 外部の子育て、介護、家事サービスを利用しながら、自分の生活が成り立つ

### <2 ゆるやかなつながりと居場所が求められる>

社会的孤立や閉じこもり傾向があると、死亡率が2.2倍となり、閉じこもりっていた男性は、要介護重症化リスクが2.1倍になるといわれています。また、外出頻度が少ないと歩行障害や認知症などのリスクが高くなります。社会とのつながりが健康を左右するなかで、大抵の人は近隣住民や地域との交流・つながりをもちたいと考えています。行政は、これまで「公助」と「共助」を重視していましたが、「自助」と「互助」を重視していく自治体が多くなっています。

そこで、住宅には以下のようなことが求められるようになります。

- ① 訪問者を受け止める「縁側・接客スペース」
- ② 交流を促す「交流スペースと外出しやすい間取り」
- ③ 外に開く家「開閉の選択制・住み開き・シェア」

### <3 寿命が長くなる>

2019年7月に発表された日本の平均寿命は、女性が87.32才、男性が81.25才でした。寿命が長くなることで、子育てが終了してから死亡するまでの期間が長くなり、ライフステージの多様化が進んでいます。一方、平均寿命と健康寿命（全くのサポートなしで生きていける期間）には、平均10～12年の乖離があり、誰もが最後の十数年は他者のサポートが必要になります。それは、自分が住んでいる家が、終末医療の現場にならないといけないことを意味します。

そこで、住宅には以下のようなことが求められるようになります。

- ① セカンドライフの「働く・学ぶ・遊ぶ・休む」の拠点
- ② IoT 技術などを使った予防医療との連携
- ③ 訪問介護など外部サービスへの対応「プライバシーを守る・動線」
- ④ 終の棲家「終末医療の場」

#### <4 働き方・仕事観が多様になる>

日本のフリーランス人口は、2015年から2018年まで、たったの3年間で913万人から1,119万人へ急増しました。そして、自宅やサテライトオフィスなど、働く場所の自由度が高いテレワーカーが増加しています。さらに、ビジネスパーソンの半数以上が在宅勤務を望んでいるというデータもあります。また60才以上男女の85%以上は70才以上まで働きたいと答えていて、実際、高齢者の就業率は上昇傾向にあります。高齢者で働きたい人はどんな就業形態がいいかというところ、地域の子育てや介護をしたい、知人や友人と一緒に趣味や特技を活かした仕事がしたいなど、柔軟で多様な働き方が望まれています。

そこで、住宅には以下のようなことが求められるようになります。

- ① 働く場・テレワークの場となる
- ② 人が訪れやすい
- ③ 自分や家族のプライバシーを守りながら仕事ができる

#### <5 居住文化の継承>

今なぜ「居住文化」について、考えなければならないのでしょうか。居住文化が注目されるようになったのは、グローバル化とインバウンドの影響によると考えられます。外国人が来るからこそ、彼らと私たちの違いが意識されるのです。そもそも「和風文化」は「洋風文化」が入ってきたことによって考えはじめられたものです。日本の良さを掘り起し、再発見することが大切ですが、それはたんなる懐古主義ではなく、現代的な利便性と過去の良さを併せ持つことが必要です。

伝統的な日本の居住文化には、次のような特徴があります。

- ① 屋内外に関係性を持たせ、一体的に部屋を使用
- ② 風を通し、光を感じ、外の快適性を取り入れる
- ③ 縁側のような空間で、景色や庭をみながら季節感を楽しむ
- ④ 多様な建具で、内と外の区切り方を調節する

伝統的な日本の住宅には、中間領域があるのが大きな特徴です。昔の縁側や軒下のような空間は、住宅のウチとソトとの中間という意味とともに、公的空間と私的空間の中間という意味もありました。最近では、住宅の断熱効果を上げることが健康にも環境にもよいとされていますが、窓ガラスをペアガラスにするとコストが高くなります。コスト

を安くするには窓の数を減らして壁を多くするため、中間領域を確保するのが難しくなっています。

中間領域は、外気の気持ちよさを室内に引き込み、四季の移ろいと季節感を家人に届けるだけでなく、訪問者を受け止め、コミュニケーションの場となり、安心感のある子どもの外遊びの場にもなります。さらに本来、屋外で行う作業（DIY など）なども中間領域でできるほか、ウチとソトのバッファゾーンとして温熱環境の違いを和らげる効果もあります。

また、今どきのライフスタイルの実現を考える時に（例えば、シェアハウス、住み開き、ホームオフィス、介護や育児のサービスの受け入れ）、中間領域は外部の人とのアクセスをコントロールし、プライバシーを守りながら住まいを開き、外とつながる場所としても有効に使うことができます。